

新型コロナウイルスに感染して

大月 和彦

晴天の霹靂だった。他人事と思っていたコロナに罹ったのだ。感染が判明してから10日間の入院生活を送り、月末に退院した。妻は濃厚接触者とされて自宅で療養していたが、同じ頃に外出制限が解かれ、以前の生活を取り戻している。

例年になく寒い日が続いた一月中旬のある日、喉が痛くなり、38、1度になった。風邪だと軽く考えていたが、念のために近くの総合病院の発熱外来へ行く。抗原検査とPCR検査の結果、両方ともプラスの反応。新型コロナウイルス感染症と診断された。妻は抗原検査がマイナス、PCR検査は判定不能との診断だった。

翌日、保健所から、電話で矢継ぎ早に症状の確認など連絡や指示が来る。夕方になって入院先はPCR検査を行なった病院に決まり、次の日の午後入院と指示される。

当日、迎えに来た保健所の車で病院へ。救急患者搬送口から車いすに乗せられ、いつもの扉を通って隔離病棟へ。ここは外部と遮断された密室の空間。「収容」されたのだ。家族との面会や外出は不可。病院の売店は利用できない。病院スタッフに頼むこともダメ。公衆電話もなく、外部と通じるのはケータイだけ。たまたま持参したペットボトルの水がなくなったので頼むと、お茶が供される食事まで待てといわれる。

ケータイと飲料水―命の綱の確保を急がなくては。家族に連絡してケータイ用の充電器とペットボトルを送ってもらう。特定の運送業者に依頼し、届いた品物は看護師監視の下で開ける仕組み。外部との遮断が最優先なのだ。

翌日、最近開発されたという*治療薬の点滴注射をする。看護師二人が付きつきりで30分、無事終わる。体温と血圧の定時測定、パルス・オキシメーターの常時着用など不自由で退屈な生活が続いた。

高熱などの症状がないままに推移し10日目、無症状者とされ、PCRの検査なしで退院した。

全国の感染者は累計442万、退院した者など元感染者が345万、死者2・1万(2月19日現在)という。感染症の実態を直視し、いたずらに怖がらないことが求められている。

*ゼビュンディ点滴静注液500mg(一般名ソトロビマブ) COVID-19の軽症・中等症の治療薬として昨春秋に承認された。